

活動実践レポート つながる明社 つながる善意

東日本大震災 緊急支援活動レポート

東日本大震災の被災者緊急支援活動で、全国各地の明社が見事につながりました。震災直後から5月までの善意のネットワークを、画像とコメントでレポートします。



く家に帰らなくては!!と新宿まで行ったものの、どうにも身動きが取れない状態の中、じりじりしながら数時間を過ごした後、やっと夜の9時過ぎに母の無事が確認できたので、帰宅を諦めて全国明社の事務所に戻ることにしたのです。

運行を再開した地下鉄は恐ろしいほどの大混雑で、とても乗れる状態ではなく新宿から新中野まで徒歩で戻ることを決断、青梅街道を歩き始めました。

途中、地図を広げて困惑している外国人観光客に、片言の英語で一生懸命に道案内しているいまだ若きカップル。不安そうに道を尋ねる人に「同じ方向に行きますから一緒にしましょう」と答える男性。

そして、マンションの入り口で「トイレ使ってください」の手書きのボードを胸に抱え、寒さに足踏みしながら、笑顔で立っていたお母さんと二人の子供たち…。

その二つひとつの光景が、一人の心を細さを忘れさせてくれ、誰もが見知らぬ互いを気遣う、その優しさが嬉しくて泣けました。

いろんなことがあるけれど、日本人、捨てたものじゃない…って、心の底からそう思った地震当日の夜でした。
(メールマガジン・編集後記より)

行動するなかで、
自ずと役割が見えてきて、
分担の責任も発生する

片桐俊晴・全国明社理事

3月13日午前8時、先発隊で新潟入りしているAMD A職員と合流し、新潟日赤に移動。医療援助緊急車輛の通行証明書を発行してもらうため交渉。1時間半後、ようやく許可書を持って新潟県警に40分後、緊急車輛の証明ステッカーをいただく。

午後3時、高速のインターへ。貸切状態の磐越自動車道、郡山ジャン

緊急支援活動の記録

- 3.11 東日本大震災発生。
- 3.12 ホームページで緊急告知
- ①各地の被害状況
- ②各地明社の緊急支援の取り組み
- ③被災地として応援してほしいこと
- NPO法人アマダ(AMD A)から医師3人看護師4人を仙台市まで輸送の協力要請。
- 3.13 片桐俊晴理事が新潟空港からAMD Aの7人をワゴン車で仙台市に輸送。
- 3.15 NPO法人ジェン(JEN)から仙台市での炊き出し用食材(缶詰、野菜)とローソクの協力要請。
- 3.16 新潟県阿賀野市の片桐理事自宅倉庫に支援物資を集積し、仙台市への搬入を決定。全国明社から新潟県明社・武藤幹事務局長に食材提供の緊急要請。武藤事務局長が新潟県下10プロック明社に緊急支援を要請。株式会社俊成出版社からローソク560本の支援。新潟県明社・武藤事務局長からローソク500本の支援。
- 3.18 JENから「諸般の事情で一時撤退。再度支援場所の連絡をする」旨の通達。
- 3.22 JENから「仙台市には物資が足りているので石巻市に調査に入る」との連絡。
- 三役会議(横ひさ恵理事長、福永正三副理事長、沼田壽雄常務理事)を開催。以下の取り組みを決定し、ホームページ(3/24付)で告知。
- ①当面、全国明社として被災地へのボランティアを募ることはいたしません。ボランティアを希望される地区明社・個人の方は、まずお住まいの都道府県・市等の「社会福祉協議会」ホームページよりボランティア情報を得て行動をしてください。
- ②被災地への支援については、既に被災地で支援活動を行っている「緊急援助事業」協定団体の「AMD A-特定非営利活動法人アマダ」と当法人の山木理事が事務局長を務める「JEN(特定非営利活動法人ジェン)」の要請に応じて、必要物資の調達・運搬等の後方支援活動を行います。
- ③被災された地域の地区明社に対して被災状況を確認し、復興支援についてのニーズを調査し、必要な支援を行います。

クシヨンから東北自動車道で一路仙台市へ。車中、菅波茂・A M D A 理事長に具体的な対応を聞くと、「こんな状況を誰が想像できますか。私たちには計画はないんです。とにかく、現場に飛び込むんです。そして、そこから考え、具体的な対策を講じていくのです。熱意と情熱、それ以外の何物でもないのです。マイナス・マイナス・プラスでしょう」。

行動するなかで、自ずと役割が見えてきて、分担の責任も発生する。それらが円滑にできるかどうかは、普段の人間関係によって決まってくる。急な頼みごとの連続だからだ。予定という言葉はない。（ホームページ、3/15「後方支援レポート」より）



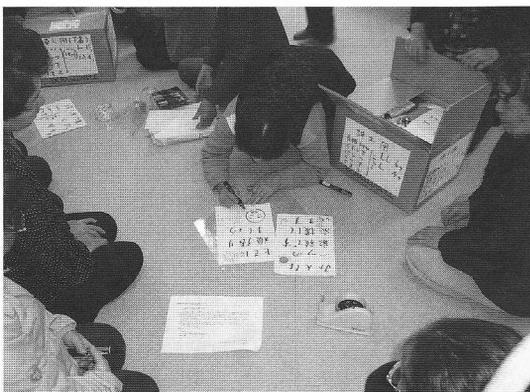
石巻市災害ボランティアセンターに物資を届ける片桐理事(3/24)

市民にアタックをすれば、開ける道は果てしない

武藤幹・新潟県明社事務局長

昨日(3月15日)、蠟燭440本獲得できそうだと報告しましたが、交渉中の蠟燭店に行くと、昨日よりも多い500本余が用意してありました。

蠟燭屋の社長夫人曰く、「昨日のあなたの電話交渉で目が醒めました。急いで倉庫を見ましたら、数年間も販売できずに倉庫にしまっていた蠟燭がたくさんありました。箱は少し埃で綺麗ではないけれど、灯すには何ら差支えはありません。もらっていただけですか」と言われましたので、喜んで無償でいただきました。



支援物資に便りを入れる(4/23、三重・安濃明社)

市民にアタックをすれば、開ける道は果てしないことの実例になるかと思ひ、お知らせしました。早速、他から寄せられたものと共に、20日に片桐氏のところに運んで行きます。

「お父さんもせっかく」

明社運動をやっているんだから！
全国の皆様と息子に背中を押されて！

萩谷岩央・宮城県明社事務局長

石巻明社の齋藤会長宅に物資を届けた帰路、車窓から津波被害の激しかった地域を見ていた息子が「お父さんもせっかく明社運動をやっているんだから、もっと被災した人のために何かやらないと」。痛い一言に反省させられました。

その翌日でした。全国明社の前原さんに全国の皆様からご支援の声が届いていることを教えられたのは、早速、齋藤会長に連絡したところ、「せめて体を拭いたあと、綺麗な下着に着替えさせてやりたい」とのご要望を聞き、全国の皆様のご協力をいただき、下着支援がスタートしました。

牡鹿半島の小さな魚村まで、足を運び届けていただいた齋藤会長のご尽力と、品目やセット方法で女性ならではの心配りをいただいた松原

原良次事務局次長、竹嶋克之事務局員を片桐理事宅に派遣。JENから石巻市の山下小学校で炊き出しを行う旨の連絡。

3.23 片桐理事宅で支援物資(4トンの荷積み)を行い、JENと搬入時間の調整。

3.24 支援物資を山下小学校へ搬入。炊き出しに必要な食材を搬入。残りの物資は石巻市災害ボランティアセンターと自衛隊の支援物資倉庫に。

3.30 前原佐智子事務局員が宮城県明社・萩谷岩央事務局長に電話。石巻明社に下着類の支援を要請される。

3.31 三重県明社下着男女女60組、国立明社下着30セット、狭山明社下着男女児童60セット、市川浦安明社下着男女400セットの計550セットが発送。以後、各地から下着類を発送。*「支援物資覧」参照。

4.7 東日本大震災における被災者支援のために結成された、全国の災害支援関係のNPO・NGO等民間団体のネットワーク「東日本大震災支援全国ネットワーク(JCN)」に会員登録(5/30現在526団体)。以後、「震災ボランティア・NPO等」と各省庁との定例連絡会議等に竹嶋事務局員を派遣。

4.10 小林康哲事務局長、原事務局次長、竹嶋事務局員を仙台市に派遣。萩谷・宮城県明社事務局長と今後の対応を検討。

